

学位論文審査の要旨

学位申請者	Betty Grace AKECH-OKULLO 【比較社会文化学専攻】 (マケレレ大学(ウガンダ) 大学院修士課程 1992年修了)	要 旨
論文題目	The Effect of Gender on the Performance of Women Ambassadors in Japan	<p>本論文は、在日ウガンダ大使であるAKECH=OKULLO氏が、自分自身のウガンダでの教育・行政の経験と日本での大使としての経験と問題意識から、駐日女性大使のパフォーマンス(実践)について、アンケートとインタビュー調査にもとづき分析し、提言を行うものである。</p> <p>第1章では、アフリカやアジアにおけるジェンダー不平等の現況と問題点を概観し、第2章では、出身国のウガンダにおいて、ジェンダー差別についての意識の違いが行政職(管理職)のパフォーマンスや昇進に関係していることを示す。外交官という職業では、世界全体でも女性の占める割合は15%程度であり、地域・国によって大きな差があり、女性の大使に対する差別的な言行があることを指摘する。第3章では、駐日女性大使15名のアンケート(およびインタビュー)調査の結果を分析する。半数以上の大使が、職務においてその役割を認知・支援されていると回答する一方で、70%近くが女性差別を感じており、外交官の同僚から不快な対応をうけたことがあると回答している。これらの業務環境には、それぞれの国の(日本を含め)社会・文化的コンテクストが関係しているとの回答が60%であった。これらの困難があるにもかかわらず、3/4以上の大使が交渉によって困難を克服・改善できていると回答する。これらの調査結果から、駐日女性大使は、ジェンダー差別を感じながらも、それを克服する努力を続けており、他方では、日本の社会文化(謙譲・秩序の尊重)が業務の遂行に寄与する側面があるとす。</p> <p>最後に、本国政府などが女性外交官のエンパワーメント(スキルおよび総合的能力)をサポートすべきこと、赴任先の社会文化についての知識をえることによりコミュニケーション(交渉)力を高めることが、女性大使の活動の強化につながると提言する。</p> <p>第1回審査委員会では、自身の経験に裏打ちされ、独自の調査(とくにウガンダにおけるジェンダー問題、駐日女性大使の調査など)にもとづく論文であることを評価しつつも、ジェンダー研究等の先行研究の評価やアンケート(聴き取り)調査の分析手法などについて、加筆・改定を求めることとした。第2回審査委員会では、改定稿を確認し、11月12日に公開発表会と最終審査会を開催した。公開発表会では、スライドを投写し、論文の概要と女性大使の活躍を示し、上記の将来にむけた提言を力強く述べた。委員および参加者からの質問に的確に応答した。以上から、外交という分野での女性に対するジェンダー差別の現状を分析し、将来への提言を示す貴重な論文であり、博士(学術)、Ph. D. in Comparative Studies of Societies and Culturesに値すると判断した。</p>
審査委員	(主査) 教授 猪崎 弥生	
	教授 三浦 徹	
	教授 佐々木 泰子	
	教授 清水 徹郎	
	講師 加納 なおみ	
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 (可 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 否)</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む イ. 著作権や個人情報に係る制約がある <input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	